

# トマス・アクィナスにおける

## 7つの「賜物」と「至福」

山口 隆介

(和文要旨)

本研究は、トマス・アクィナスにおける、聖霊の7つの「賜物 (donum)」および「至福 (beatitudo)」概念についての研究である。その目的は、聖霊の7つの賜物およびそれらに対応する7つの至福について、トマスの聖書註解である『マタイ福音書註解』に依拠しつつ理解を深めることと、トマスの聖書註解の秘めている可能性を示すことである。

トマスの徳論研究は従来、信仰・希望・愛から成る三対神徳と、思慮・正義・勇氣・節制から成る四枢要徳に集中してきており、聖霊の7つの賜物とそれらに対応する7つの至福については、最近まで関心をもたれることは比較的少なかった。また、トマスの聖書註解というテキスト群は、その研究の必要性と重要性が指摘されながら、本格的な研究が遅れている分野である。

トマスは、その主著『神学大全』でも、賜物と対応する至福について論じてはいるが、その関心は、徳の体系にどう賜物を位置付けるか、どの賜物がどの至福に対応するかの見定めであり、賜物それ自体の体系は前景に押し出してこない。彼が賜物それ自体の体系について論じているのは聖書註解である『イザヤ書註解』であり『カテナ・アウレア』であり、そして『マタイ福音書註解』である。

トマスがイエスの至福に関する教えをどう理解したかを追体験することで、トマス思想の従来は注目されなかった面に光を当てると共に、それを可能とするトマスの聖書註解という文献の可能性を明らかにすることができるだろう。

キーワード

7つの至福、功德、賜物、徳、トマス・アクィナスの聖書註解

(SUMMARY)

The present paper examines the seven gifts of the Holy Spirit and the corresponding beatitudes in Thomas Aquinas's *Super Evangelium S. Matthaei Lectura*, a commentary on the Gospel of Matthew. It aims to deepen our understanding of the seven gifts of the Holy Spirit and the corresponding seven beatitudes, relying on Aquinas's biblical commentary, and to exhibit their potential.

In studies on Aquinas's theory of virtue, people have focused discussions on the three theological virtues of faith, hope and charity, and the four cardinal virtues of prudence, justice, fortitude and temperance. However, the seven gifts of the Holy Spirit and the corresponding seven beatitudes have been given comparatively less attention, until recently.

In *Summa Theologiae*, considered Aquinas's main work, he discusses the gifts and their corresponding

beatitudes, evaluating where the gifts take place in the system of virtues and to which beatitude each of them corresponds. He does not highlight the connection between the gifts themselves in that work, but he does write about it in his commentary on the Sermon on the Mount in the Gospel of Matthew.

The Sermon on the Mount commentary will provide clues to a deeper understanding of the gifts and beatitudes by reflecting on their features.

#### Keywords

the Beatitudes, merits, gifts, virtues, Scripture Commentary by Thomas Aquinas

### 1. 目的

本稿は、トマス・アクィナスの『マタイ福音書註解』における、山上の垂訓冒頭の、7つの至福についてイエスが教えを垂れる箇所の註解の研究である<sup>1</sup>。トマス思想の研究はこれまで『神学大全』の研究に集中しており、トマスの著した様々な聖書註解の研究は、必要性が指摘されながら十分なされてこなかった。その理由の一つには、聖書の註解という形式の書物は、聖書の文言に沿って論述が進むため体系的な記述が難しく<sup>2</sup>、研究者にとって体系的解釈が困難ということが考えられる。しかしながら、7つの至福についてイエスが教えを垂れる箇所をトマス・アクィナスが註解する時、彼は、イエスの語る至福の順序に、より神から遠いものを起点とし、段階的に神へと近づいていく秩序を見いだしている。したがって、7つの至福についての註釈に関する限り、トマス思想の一面についての体系的解釈は比較的容

<sup>1</sup> 本研究ではテキストとしてマリエッティ版、すなわち S. Thomae Aquinatis Doctoris Angelici Super Evangelium S. Matthaei Lectura, cura R. Raphaelis CAI, O.P., Editio V revisa, Marietti, 1951 (以下、マリエッティ版『マタイ福音書註解』と呼称する)を採用した。

『マタイ福音書註解』の研究は注意を要する。まず、これはトマスの講義の筆記録をトマス自身の校閲を経ず出版したものである(このようなものを reportatio と呼ぶ)。さらに、マリエッティ版『マタイ福音書註解』の444-582節および603-610節は別人の註解が挿入されたものである(J.-P.トレル(2018)『トマス・アクィナス 人と著作』保井亮人訳、知泉書館(原典は2008年発行)p.579参照)。本研究で解釈の対象とするのは403-443節である。

なお執筆時期について、マリエッティ版の「序文(Praefacio)」では執筆時期は1256-59年の第1次パリ教授時代に同定した表を掲載している(マリエッティ版の序文、p.5参照)が、J.-P.トレルは「高い蓋然性で1269-70年の学年に位置付けることができる」(保井訳前掲箇所)としている。筆者はいずれが正しいかを判断できないが、いずれが正しくとも、この註解が、『神学大全』註で賜物や7つの至福に関する議論がなされる第2部の執筆時期(1271年-72年)に先行することは確かである。つまり、7つの至福に関するイエスの言葉の註解作業を下敷きにして、トマスの主著『神学大全』第2部での至福や賜物の議論はなされているのである。

<sup>2</sup> トマス自身、聖書註解という形式の書物は、聖書の文言に沿って論述が進むため体系的な配列が難しいと自覚していたとの指摘もある。山本芳久(2018)「トマス・アクィナスの聖書註解 ―著作群におけるその位置づけ―」、『理想』701号(p.28-41所収)、理想社、p.39-40参照。

易と思われる。

なお、ここで語られる体系性は「聖霊の賜物 (donum Spiritus Sancti)」の内的連関であるが、これはトマスの主著とされる『神学大全』では前景に出てこない。また、7つの至福についての註解でトマスは、至福に至るための具体的な実践についても言及するが、「至福に至るため、この世では具体的にどのように生きるべきか」ということについては『神学大全』では問題や項目として直接とりあげられることは少なく<sup>3</sup>、また散発的である。

したがって、『マタイ福音書註解』の当該箇所は、至福へと至る具体的な実践という『神学大全』には表れにくい主題が、トマスの体系の中で論述されている箇所であるということになる。

本稿の目的は『マタイ福音書註解』の上述箇所の研究を通じて、トマスの、これまで研究が集中してきた書物では前景に出てこなかったトマス思想の一面、すなわち至福へと向かう具体的な実践に関するトマスの体系的思索を浮かび上がらせることである。このことは、トマス思想の従来注目されてこなかった部分に光を当てるものであるとともに、十分に研究されていないトマスの聖書註解が秘める可能性のほんの一端を示唆するものであろう。

## 2. 7つの至福の内的体系性および外部との関連における体系性

「マタイ福音書」第5章の、山上の垂訓の冒頭のいわゆる真福八端の箇所は以下のとおりである。

「霊において貧しい人たちは至福である。天の国はその人たちのものである。

柔和な人たちは至福である。その人たちは地を所有するだろう。

悲しむ人たちは至福である。その人たちは慰められるだろう。

義に餓え渇く人たちは至福である。その人たちは満たされるだろう。

あわれみ深い人たちは至福である。その人たちはあわれみを受けるだろう。

心の清い人たちは至福である。その人たちは神を見るだろう。

平和を作る人たちは至福である。その人たちは神の子と呼ばれるだろう。

義のために迫害される人たちは至福である。天の国はその人たちのものである」<sup>4</sup>

<sup>3</sup> 例外としては、たとえば「人は謙遜のゆえにすべての人の下に身を置かなければならないか」(『神学大全』、第2部の2、第161問題、第3項参照)などがある。なお、『神学大全』について本研究では特にレオ版を参照したが、版の違いで生じる細かな文言の違いは本研究には特段の影響を及ぼさないと判断したため、以下、特別の理由がない限り『神学大全』を参照する場合特に版の指定は行わない。

<sup>4</sup> 山上の垂訓の冒頭には特に定着している日本語訳が存在するが、トマスの議論との兼ね合いがあるので、マリエッティ版『マタイ福音書註解』、p.63掲載のラテン語聖句を筆者が新たに訳出した。

上述の文言に関する『マタイ福音書註解』の理解では、各行前半の「〇〇の人たちは至福である」が至福をもたらす功德を示し、後半が功德の報酬を示す<sup>5</sup>。そして、報酬はすべて天国であり、それを「地を所有する」「慰められる」「満たされる」「あわれみを受ける」「神を見る」「神の子と呼ばれる」のように言い換えているということになる。

トマスは、人間が最も求めるものは至福であるのでイエスはそこから教えを始めているのだと解した上で、人間の至福とは何かを論ずるのだが、その際最初にするのは、至福についての謬見の列記である。すなわち、ある人々は①外的なもの・時間的なものの充溢が人間の至福であるとみなし、同様に②意志の充足あるいは欲求の充足、③活動的徳、④観想的徳を、それぞれ人間の至福と見做す人々がいると述べる。そして、それらの謬見のうち①を否定するのが霊の貧しさであるとする。次いで、②の欲求の充足については、欲求には怒情的欲求・欲情的欲求・意志の3種類があることが述べられ、怒情的欲求の充足に至福があるとする謬見を否定するのが柔和さ、欲情的欲求の充足に至福があるとする謬見を否定するのが悲しみであるとする<sup>6</sup>。

次いで意志の充足に至福があるとする謬見が論じられる。意志はさらに、どんな上位の法にも制約されないことを求める意志と、他のものを動かす、すなわち他のものに優越することを求める意志という2種類の意志に分けられ、前者の制約されないことを求める意志を否定するのが義への餓え渇きであり、後者の優越することを求める意志を否定するのがあわれみ深さであると位置づけられている<sup>7</sup>。

次が活動的徳であるが、活動的には至福ではないが、至福への道であるとされる。そして、節制のような活動的徳の場合、その徳を有する者本人を至福へと方向づけるが、その際この方向づけとしての活動的徳が目指しているのは心が清くなることとされる。また、活動的徳にはその徳を有する本人ではなく他者に向かうものもあり、そのような徳が至福へと方向づける場合は、平和を目的とするとされる<sup>8</sup>。

最後に④観想的徳については、この世の時間のうちでは観想的徳によって完全な至福に至ることはできず、天国での神の観想、すなわち、「神の直視 (visio Dei)」のうちにのみ完全な至福はあるとされる。そして、神の直視には、「神との愛による合一 (unio amoris)」がある。それゆえに、直視に対しては「神を見るだろう」、愛による合一に対しては「神の子と呼

<sup>5</sup> マリエッティ版『マタイ福音書註解』、p.66、409節。

<sup>6</sup> 本段落はマリエッティ版『マタイ福音書註解』、p.65、404-406節の内容に当たる。

<sup>7</sup> マリエッティ版『マタイ福音書註解』、p.65、406節。

<sup>8</sup> マリエッティ版『マタイ福音書註解』、p.65、407節。

ばれるだろう」との言及があると指摘される。なお、前述の通り、至福は天国でのみ完全に実現する。しかしながら、それではこの世では至福は全く不可能なのかというところではなく、至福のなんらかの端緒は得ることができる<sup>9</sup>。これはもちろん不完全なものであるが、不完全ながらも至福である<sup>10</sup>。

上述の議論のうち、徳に関するところをまとめると、トマスは観想的徳をこの世においては不完全な至福にしか至りえないものとし、活動的徳を至福そのものではなく至福への道とする<sup>11</sup>。しかしながら、活動的徳は至福への道に過ぎないとは言え、至福への道を歩むことそのものの中に至福の端緒があると言うことはできまいか。現にトマスは、本註解の他の箇所では、義に餓え渴くものに対する「満たされる」という報酬について、第1には永遠の直視のうちにあるが、第2には現世のうちにあるとする。そして、「私の食物は、私をつかわし、そのわざを私が完成させる者〔すなわち神〕の意志を私が実行することである」<sup>12</sup>という聖句を引く<sup>13</sup>。

このようなことを考え合わせると、上で確かにトマス自身が、活動的徳は至福そのものではなく至福への道に過ぎないとし、活動的徳のうちには至福があることを否定してはいるものの、活動的徳の実践のうちにも至福の端緒があるとは言えるのではなかろうか。それは、観想的徳においてこの世での観想が、最終的に至福の端緒をもたらすことが認められつつも、いったんはこの世においては神の直視はあり得ないという理由で、それに至福を見いだすことが誤謬とされた<sup>14</sup>ことと並行している事態と言えよう。

そして、真福八端のうち上述の7つまでが至福そのものを扱うものとされる（義のために迫害されることは、至福そのものではなく至福の証しとされる<sup>15</sup>）。そして、これらの7つには聖霊からの「靈感（*inspiratio*）」や「衝動（*instinctus*）」に動かされた徳である賜物が対応しているとされる。つまりこの賜物という神の介入によって高められた徳が、功德となるわざを支えているということになる。

そして、徳は3つのことをなすとされる。すなわち、(1) 悪から離れる、(2) 善をなす、

---

<sup>9</sup> マリエッティ版『マタイ福音書註解』、p.66、413節。

<sup>10</sup> マリエッティ版『マタイ福音書註解』、p.65-66、408節。

<sup>11</sup> マリエッティ版『マタイ福音書註解』、p.65-66、408節。

<sup>12</sup> ヨブ 4:34。この聖句について、註解ではアウグスティヌスが講解していることまで言及されているが、そのアウグスティヌスの講解は『カテナ・アウレア』（トマスが、四福音書についての教父たちの註解を組み合わせて編纂した註解集）にも収録されており、トマスにとって重要な内容であることが推察される。マリエッティ版『カテナ・アウレア』、第1部「マタイ福音書」、5章、4、p.74参照。

<sup>13</sup> マリエッティ版『マタイ福音書註解』、p.69、428節。

<sup>14</sup> マリエッティ版『マタイ福音書註解』、p.65、404節。

<sup>15</sup> マリエッティ版『マタイ福音書註解』、p.66、414節。

(3) 最善のものに対して準備をする、という3つである<sup>16</sup>。トマス思想では、徳とは、善悪のどちらにも固定されていない人間という生きものが、自らの生き方を通して自分のふるまいと考え方を善の方に固定していく中で身に着いていくものであり、それには悪から離れる段階と、善へと向かう、すなわち積極的に善をなす段階がある。そして、最善のもの、すなわち人間を超える善である神を見るということに対してはそれを自らの力でなすことはできず、ただ準備することしかできない。それゆえに、準備という段階が最終のものとなると解釈できる。

そして上述の7つの功德の各行は、徳の3つの段階に以下のように振り分けられる。また、各功德および至福には、上で述べた通り対応している賜物がある。さらにトマスはそれらの賜物を「枢要徳 (virtutes cardinales)」および「対神徳 (virtutes theologicae)」に属する部分的な徳の一つと位置付けている。これらの対応および所属関係も下表に示す。

徳の段階	功德	賜物	枢要徳 or 対神徳
悪から離れる	霊の貧しさ	おそれ (timor)	希望
	柔和	敬虔 (pietas)	正義
	悲しみ	知識 (scientia)	信仰
善をなす	義への餓え渴き	勇気 (fortitudo)	勇気
	あわれみ深さ	おもんばかり (consilium)	思慮
最善のものに 対して準備をする	心の清さ	直知 (intellectus)	信仰
	平和を作ること	知恵 (sapientia)	愛徳

なお、それぞれの賜物がいずれの枢要徳あるいは対神徳の部分的徳すなわち一面であるかは、『マタイ福音書註解』では一切言及されず、『神学大全』で論じられる。すなわち、『マタイ福音書註解』というテキストの外のトマス思想全体を前提として見えてくる体系性である。しかしながら、なぜ『マタイ福音書註解』に登場しない枢要徳および対神徳と賜物との対応関係に前掲の表で言及するかというと、以下に述べる通り、その対応関係に注目することで7つの功德が人間の全的な完成に体系的に対応しているということが見えてくるからである。

枢要徳は、人間の靈魂を、知性・意志・怒情的情念・欲情的情念の4区分でとらえた時、その4区分それぞれを善へと向けて固定する「思慮 (prudentia)」・「正義 (iustitia)」・「勇気 (fortitudo)」・「節制 (temperantia)」という4つの徳である。つまり、この4つの徳に

<sup>16</sup> マリエッティ版『マタイ福音書註解』、p.66、414節。

よって人間の靈魂は全体的に完成する<sup>17</sup>。枢要徳が本質的には人間の能力だけで獲得可能な徳であるのに対して、信仰と希望と愛徳という3つの対神徳は、人間の力だけでは獲得できず、神から注入される徳とされる。そしてこの3つの対神徳の場合も、信仰は理性を、希望は怒情的情念を、愛徳は意志を完成させる。欲情的情念が抜け落ちているが、愛徳はすべての徳の形相とも言われ、愛徳によって他の徳も神に向かう徳として完成される。それゆえに、対神徳もまた、それによって人間の靈魂全体を神に向けて完成させる徳であると言える。したがって、聖霊の7つの賜物を媒介とし枢要徳および対神徳と関連付けられることで、7つの功德は人間の靈魂の全的完成と対応していることが予感される。

しかしながら、上述のような体系性を期待すると、枢要徳中の節制だけが対応する賜物を持たないことが体系的な瑕疵となってあらわれてくる。この事態について今のところは、トマスが『神学大全』で「節制は何らかの仕方でおそれの賜物に対応するものである……ある人が神へのおそれゆえに邪悪な楽しみを避けるということはおそれの賜物に属することだからである」<sup>18</sup>と述べていることに触れておく。おそれの賜物に対応するのは靈の貧しさであるので、節制は何らかの仕方ですの貧しさという功德に関わっているということが示唆される。以下で7つの功德そのものについての議論を試みるが、節制の件についてはその議論の中で再び触れたいと思う。

### 3. 具体的実践としての7つの功德

7つの至福および功德についてのトマスの議論では、各功德が、具体的な生き方として示されている<sup>19</sup>。そこで以下では、本研究の関心に則り、各功德の具体的実践としての記述の要約を試みる。

まず、第1が靈における貧しさである。これは、外的に貧しいだけでなく、内的にも自分を貧しい者とみなすことである。このような者を『マタイ福音書註解』では、真に謙遜な者と呼んでいる。さらに『マタイ福音書註解』では、謙遜に生きることによる貧しさは、自らの意志による貧しさであるとする。そしてそれには、(1) 富を有していても心で有していない、すなわち富を有しているが執着しないという生き方と、(2) 富を決して持たず、持とう

---

<sup>17</sup> これが、枢要徳が4つであり、4つより多くもなく4つより少なくもない理由である。松根伸治(2015)「枢要徳はなぜ四つか—トマス・アクィナスによる理論化—」、『南山神学』38号、(pp.109-143 所収)、p.136 参照。

<sup>18</sup> 『神学大全』、第2部の1、第68問、第4項、第1異論解答参照。

<sup>19</sup> 本章で示される「生き方」が具体的か抽象的かについては意見が分かれるかもしれない。ここでは、具体的という評価が筆者の独断でないことを示すために、同じく concrete actions が示されていると評価している研究を挙げておく。Cf. Anton ten Klooster(2016), 'The Beatitudes as Acts of the Virtues in Aquinas' Lectura on Matthew' in: *Jaarboek Thomas Instituut te Utrecht*, 35(pp.75-91), p.88; p.90.

と努めない生き方とがあるとされる<sup>20</sup>。

第2に、柔和さについて論じられる。柔和であるということは、(1) 怒らなくなることと(2) 怒りが生じてもそれを抑えることとされる。そして、これは敬虔の賜物に対応している。「怒る人とは本来、神の秩序づけに満足していない人だからである」<sup>21</sup>。すなわち、神の秩序づけに敬虔に従う人は怒る必要がない。

第3は悲しみであり、これに以下の3通りがある。(1) 自分の罪だけでなく、他人の罪をも悲しむ、(2) 現世的な悲惨を悲しむ、(3) 世の喜びを捨てることを悲しむ。(3) だけ悲しみの方向性が違うが、トマスは以下のように説明する。世を捨てることによって世は死ぬので、私たちは死者について悲しむように、世を「捨てる際には、何らかの苦痛を感じないではいられない」<sup>22</sup>。

第4は、義への餓え渴きであり、この世では決して実現できない正義を、この世では決して実現できないがゆえに、あくことなく追求するという生き方である。本当に満たされるのは、天国に行ってからだが、この世でも、義をあくことなく追求するという実行を通して満たされる<sup>23</sup>。

第5が、あわれみ深さであり、これは隣人の悲惨を取り除こうとすることである<sup>24</sup>。

第6が心の清さであり、これは、神に反する思考から精神を清め、また倫理徳を涵養するということである。トマスは特に貞潔の徳をとり上げている。

第7が平和を作ることであり、これは、隣人愛を準備することである。具体的な生き方としては、(1) 神へと従属する、(2) 人間の下位の力を人間に従属させる（すなわち、原罪によって知性に不従順になっている諸力を知性に従わせる）生き方である。(3) このように内的秩序を完成させているがゆえに、他者に対しても平和であるということになる<sup>25</sup>。

以上が具体的実践としての各功徳を7つの段階を通して論じているトマスの論述の要約である。以下ではこの論述の体系性という観点から注目すべき点を論じていく。

#### 4. 謙遜と節制

<sup>20</sup> マリエッティ版『マタイ福音書註解』、p.67、416節。

<sup>21</sup> マリエッティ版『マタイ福音書註解』、p.67、421節。訳文は、山口隆介(2017)「トマス・アクィナス『マタイ福音書註解』抄訳 一山上の垂訓冒頭の7つの至福の箇所一」、聖泉大学紀要『聖泉論叢』(p.83-105所収)、p.92に既出。

<sup>22</sup> マリエッティ版『マタイ福音書註解』、pp.67-68、422節。

<sup>23</sup> マリエッティ版『マタイ福音書註解』、p.68-69、428節。

<sup>24</sup> マリエッティ版『マタイ福音書註解』、p.69、430節。

<sup>25</sup> マリエッティ版『マタイ福音書註解』、pp.70-71、438節。



まず、上に予告したとおり、賜物と枢要徳および対神徳との所属関係を列記すると節制だけがそれに属するたまものを持たず、そのため7つの至福ないし功德にも唯一節制が、そして節制による欲情的欲求能力の完成が関係を持たないことになってしまうという問題について論じる。先にも述べたように、節制についてトマスは、おそれの賜物との関連を見いだしている。そして、おそれの賜物と対応しているのは霊の貧しさであるが、上述の通り、霊の貧しさは「謙遜 (humilitas)」と解釈されている。そして、謙遜はトマスにおいては、節制の徳に属する部分的徳である<sup>26</sup>。

おそれの賜物が霊の貧しさに対応するのは、神への正しいおそれは神への敬意をなすからだというのがトマスの理由づけである<sup>27</sup>。そして、謙遜もまた神に対して自分の分際を自覚し、それを超えないということである。このように考えるなら、神をおそれるがゆえに謙遜であると言うこともできれば、謙遜であるがゆえに神をおそれるということもできよう。

そこでこう理解することが出来る。霊の貧しさはおそれの賜物が対応している。そして、おそれの賜物は希望に属している。しかし、謙遜を介して節制もまたおそれの賜物に関連している。すなわち、謙遜とおそれの賜物を介して、節制という欲情的情念の完成は、希望という怒情的情念の完成と共に霊の貧しさに関連している。

## 5. トマスにおける賜物と至福の対応

トマスにおける7つの功德の議論において、賜物との対応がどのような重みを占めているかは一つの大きな問題である。体系性を重んじるなら、賜物と7つの功德および至福の関係は明確である方がよい。実際にトマスも、7つの至福と7つの賜物との対応については、アウグスティヌスの権威に基づいて明言している<sup>28</sup>。ただし、トマスの議論を追っていくと、トマスがこの対応関係の明確さにどこまで確信を持っていたかは疑問が生ずる。

まず、『神学大全』で敬虔が柔和さに対応するということについては、トマスは敬虔が対応するのは第2の至福すなわち「柔和な人たちは至福である。その人たちは地を所有するだろう」であるとしつつも、第4の至福「義に餓え渴く人たちは至福である」および第5の至福「あわれみ深い人たちは至福である」に対応する可能性も否定してはない<sup>29</sup>。ちなみにその箇所に註解をつけているカエターヌスは、明らかに第4および第5の至福への対応に軍配を

<sup>26</sup> 『神学大全』2部の2、第143問、第1項、主文参照。

<sup>27</sup> マリエッティ版『マタイ福音書註解』、p.67、418節。

<sup>28</sup> マリエッティ版『カテナ・アウレア』、第1部「マタイ福音書」、5章、8、p.76。

<sup>29</sup> 『神学大全』、第2部の2、第121問、第2項、主文参照。

上げている<sup>30</sup>。

また、『マタイ福音書註解』では至福と賜物との対応は、基本的に各至福について論じる際に言明されるが、第6の至福「心の清い人たちは至福である」と直知の賜物の対応は、トマスが失念したのか言及が欠落している。つまり、至福と賜物を明確に対応させることをトマスが重視していたということは確認しきれない。

そもそも『マタイ福音書註解』で賜物は、至福との対応は確かに言及されるが、議論を推進する役目を担わされてはいない。『マタイ福音書註解』で議論を推進させる役割を担うのは、神から遠く離れた物質的利益やこの世的な欲求充足、世そのものへの執着から脱し、善をなしつつ、神に直接関わる至福の準備へと段階的に進んでいく方向性である。

そういった事情を考えると、『マタイ福音書註解』でも賜物と至福の対応は、アウグスティヌスの権威ゆえに言及されるが議論の中心ではない。ただ賜物もその一種と言える徳が功德を支えているという全体的な理解は『マタイ福音書註解』の場合は必要とされている<sup>31</sup>。すなわち、人間は恵みにただ動かされるだけでなく、徳によって恵みと共に働く協働者であり、7つの功德のような人間の力を超える功德の実践にあっても、人間の能力が協働しているということである。

それゆえに、アウグスティヌスが示した7つの賜物と7つの至福の対応は、トマスにおいても否定はされない。にもかかわらず、7つの賜物のうちに所属する部分的徳を見いだすことができない節制もまた、7つの至福のうちで協働していると解釈することは、可能性としてはゆるされるであろう。

## 6. 相互性

『マタイ福音書註解』では、7つの至福は段階的に配列されている。実際にトマスは、山上の垂訓での7つの至福は、下位のものから上位のものへと上っていく形で配列されていると述べている<sup>32</sup>。だが、現実には、トマスは功德のいくつかに一方向的な上下関係ではなく、互いに成立させあう、あるいは上下関係が入れ替わりうる相互性を見いだしている。

その一つが義への餓え渴きとあわれみ深さである。これらの関係について『マタイ福音書註解』は「あわれみのない正義は残酷であり、正義のないあわれみは弱さの母である」<sup>33</sup>と述

<sup>30</sup> レオ版『神学大全』・第2部の2・第121問・第2項へのカエターヌスの註釈（レオ版『トマス・アクィナス全集』第9巻、p.473所収）参照。

<sup>31</sup> マリエッティ版『マタイ福音書註解』、p.66、410節。

<sup>32</sup> マリエッティ版『マタイ福音書註解』、p.67、418節。

<sup>33</sup> マリエッティ版『マタイ福音書註解』、p.69、429節。訳文は山口前掲訳、p.97に既出。

べているが、ほぼ同じ意味の記述は『カテナ・アウレア』でも『行間註解』からの転載のうちに見出すことができる。『行間註解』からの転載は次のように語っている。「正義とあわれみは一方が他方をおさえるように結びついている。すなわち、正義はあわれみなくしては残酷であり、あわれみは正義なくしては弱さである」<sup>34</sup>。ちなみに『カテナ・アウレア』で議論を推進するのは各功德の次の功德との内的連関であるが、この内的連関を示すのに『カテナ・アウレア』ではもっぱらアンブロシウスの『ルカ福音書註解』5巻が用いられている。ただ一箇所だけ内的連関を『行間註解』によって説明しているのが、義への飢え渴きからあわれみ深さへと進む箇所である。この事実から、義の善もあわれみの善も片方だけでは成立しないと明言することへのトマスの思い入れが伺われる<sup>35</sup>。

今一つの相互性は、神を見ることと平和を作ることとの間に見出される。この2つの関係は互いに「上に付け加わっている (superaddunt)」、すなわち、互いにより上位に位置しあっているとされる。具体的にはどのように優越しあっているのかというと、「あわれみをなすこと〔隣人愛すなわち平和を作ることと呼ばれること〕は満足すること〔神を見ること〕に優る。満足することは自身に釣り合うもので満たされることである。しかし、あわれみはあふれ出す〔すなわち、釣り合いは崩れている〕。また、あわれみを受ける者は皆が皆、王によって王を見るべく派遣されるわけではない〔平和を作ることが常に神を見ることを伴うわけではない。その意味では神を見ることは隣人愛すなわち平和を作ることより高度である〕。また同じく、王の子であることは、王を見ることに優る〔平和を作る神の子であることは、神を見ることに優る〕」<sup>36</sup>と記されている。

この相互性が7つの至福すべての間に成り立つか否かは現時点では判断はできない。しかし、7つの至福ないし功德は、最善のもの、すなわち神と至福への方向づけの直接性の度合いにより序列化できるとしても、神の直視=神との愛による合一へと向かう功德であるという点で相互に支えあっていると解釈することは、可能性としては許されるだろう。

## 7. 知識とおもんばかり

---

<sup>34</sup> マリエッティ版『カテナ・アウレア』、第1部「マタイ福音書」、5章、5、p.74参照。訳文は、山口隆介(2017)「トマス・アクィナス『カテナ・アウレア』抄訳—真福八端—」聖泉大学紀要『聖泉論叢』(p.65-81所収)、p.72を一部改めた。

<sup>35</sup> ちなみにアンブロシウスの『ルカ福音書5章註解』における、義への飢え渴きからあわれみ深さへと進む箇所の議論は次のとおりである。「……義にはあわれみが続く。それゆえにこう言われているのだ。「〔彼は〕あちこちに行って貧しい人たちに与えた。その義は永遠にとどまる」(詩111:9)」。アンブロシウス『ルカ福音書5章講解』(ミーニュ『ラテン教父集』15巻、1737)参照。すなわち、アンブロシウスの場合もあわれみのうちに義が成立するという意識はあるが、相互に成立させあう関係は前面に出てきていない。

<sup>36</sup> マリエッティ版『マタイ福音書註解』、p.71、440節。

ここまで、トマスによる7つの至福についての議論が内的にも、またこの議論の外部にあるトマス思想、具体的にはその徳論との関連においても体系的に展開されていることを、部分的にはあるが確認してきた。この体系性に立ったうえで、功德の具体的実践について今一度詳しく見ておきたい。個々の至福ないし功德について註解することで、不完全ながらこの世で可能な限りでの至福の実現となる具体的実践を明らかにするということは、神学の教師であったトマスの関心に入らなかったわけがないからである。

ここでは、第3の悲しみと第5のあわれみ深さをとりあげることとする。悲しみには知識の賜物が対応している。知識の賜物は、この世のことについて、この世を超えたものへと向かう秩序において認識することができる徳である。そして、トマスは悲しみと知識の賜物との対応という局面で悲しむ人たちと捉えているのは、他者の悲慘を認識する人たちである<sup>37</sup>。そして、この他者の悲慘を取り除こうとするのがあわれみ深さだが、そこで他者の悲慘は2種類あると言われる。悲慘には①時間的悲慘と②罪や悪徳のうちにある悲慘とがある。時間的悲慘とは、時間の中でであう外的事物の欠乏等による悲慘であり、物質的悲慘とも言える。この2つの悲慘のうち、本来の悲慘は罪や悪徳のうちにある悲慘である<sup>38</sup>。これは神から離れることだからである。

そして、この悲慘を取り除こうとするあわれみ深さだが、これに対応する賜物はおもんばかりである。おもんばかりは、永遠の生命すなわち天国での完全な至福という目的に至るためにその手立てを講じる徳であり、この世の危険の中でわれわれが「あわれみをなす (misericordiam consequi)」には、おもんばかりが唯一のもの<sup>39</sup>、すなわちこれだけは必要不可欠であるとされる。すなわち、あわれみをなすというのは他者の悲慘を取り除くということであるが、それにはこの世の危険に取り巻かれた状況でいかに他者を至福に近づけていくかという手段についての具体的な実践的思考の力が不可欠ということである。それは確かに賜物であり、したがって靈感によって動かされた実践的思考力である。これがどのようなものであるかは、具体的な推察は不可能で、神からのほたらきかけに開かれた実践的思考としか言いようがない。ただ、そうであってもこれはこの世の危険を視野に入れた実践的思考の力であることに違いはない。つまり、隣人と共に至福に至るために悪徳の悲慘を実際に取り除いていくには、神からのほたらきかけにおのれを開きつつ、この世の危険の中で具体的に考えることが不可欠だということである。

<sup>37</sup> マリエッティ版『マタイ福音書註解』、p.68、424節。

<sup>38</sup> マリエッティ版『マタイ福音書註解』、p.69、430節。

<sup>39</sup> マリエッティ版『マタイ福音書註解』、p.69、432節。

## 8. 結びに代えて

補足も交えて本稿での議論をまとめると、本稿では、『マタイ福音書註解』における真福八端の箇所、特に7つの至福についてのトマスの註解に、内的な体系性とテキスト外のトマスの思想との外的な関連における体系性とを確認してきた。その体系性とは、人間の靈魂の能力全体の善への固定と完成が、功德としてなされる「靈の貧しさ」「柔和さ」「悲しみ」「義への餓え渴き」「あわれみ深さ」「心の清さ」「平和を作ること」を支えているということ、そして、この7つの功德は、至福とのかかわりの直接性によって序列化されており、かつ徳の3つの方向性によって3段階に分けられているというものである。

これらの功德に直接対応する徳は、聖靈からの靈感あるいは衝動によるという特別な徳であり、徳と区別されて賜物と呼ばれる。その意味で、これらの功德は、聖靈からの靈感や衝動を前提とする。しかし、同時に、例えばあわれみ深さにおいて隣人を罪や悪徳から解放するには、この世の危険についても十分理解した上で、至福へと向かう具体的な方法を考え出さなければならない。

1. でも述べた通り『神学大全』などでは、体系的著作という特性もあり、具体的な実践についての教えは局所的にしか見られない。そして、そのような箇所は分散しており、トマスの思想の中での体系的連関に位置づけるのは困難である。7つの至福の註解では、トマスが個々の功德を具体的な実践として記述しなおしており、そして、それらの記述に内的体系性と、トマスの徳論につながる外的体系性が見出される。

本稿は『マタイ福音書註解』の持つ豊かな可能性の一端を示唆するものに過ぎず、この文献の真価を十分に明らかにしたものでないことは言うまでもない。ただ、この十分に研究されていない文献が（そしておそらくはトマスの聖書註解という未開拓分野そのものが）、体系的理論書には表れにくいトマス思想の一面を秘めている可能性については、今後この文献について（そして当該の未開拓分野について）さらに研究が進められることによってさらに明らかになっていくことだろう。